

皆様、こんにちは。
府中教会、アンドレアです

先週の聖霊降臨の主日で復活節は終わりましたが、本日の日曜日は、三位一体の主日という特別な祭日になっています。教会の暦は、待降節から聖霊降臨という約半年をかけて、イエスの誕生から始まり 洗礼、宣教活動、受難、死、復活、昇天、聖霊降臨を記念してきました。本日の祝日は、神の大きな救いの出来事を振り返り、父と子と聖霊の働き全体を味わう日と考えればよいと教会の伝承は伝えています。

第一朗読によると、「主は雲のうちにあって降り、モーセと共にそこに立ち、主の御名を宣言された。主は彼の前を通り過ぎて、『主、主、憐れみ深く恵みに富む神、忍耐強く、慈しみとまことに満ちた者』と宣言されました。モーセが体験したことから出発するなら、三位一体の主日の礼拝では、神学的な教えよりも、慈しみに満ちておられる神の素晴らしい救いの愛について考えるのがいいでしょう。

三位一体の神の私たち人間に対する深い愛と慈しみは、本日の福音にもよく表現されています。ところで、だれか、特にキリスト教徒ではない人に「イエス・キリストの生涯についてですが、なぜ 神様が人間の歴史の中に 来てくださったのですか」と尋ねられたら、本日の福音の箇所を、情熱をこめて唱えてください。イエスの福音の中心ですから。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された」。実は、福音の原語のテキストを読んでもみると、「神は世を非常に愛されたからこそ、その独り子をお与えになりました」と翻訳するのがよいと思います。「世を非常に愛するからこそ」という原因で、神が与えられたのは、物ではなく、自分自身でした。イエスの弟子たちが体験したことは、神の人間に対する決定的な救いの働きが、「イエスの派遣」「聖霊の派遣」という二通りの仕方でなされた、ということでした。今日も、教会のお陰で、イエスの父である神が、子であるイエスと聖霊を通して私たちに同じ決定的な救いの働きかけをしてくださっています。

ところで、本日の典礼は、あわれみ深い三位一体の神に礼拝と賛美を捧げるだけでなく、私たちに、喜びと平和にみちた、しかも一致の生活を求めています。第二朗読で、パウロがコリントにおける教会に、「兄弟たち、喜びなさい。完全な者になりなさい。励まし合いなさい。思いを一つにしなさい。そうすれば、愛と平和の神があなたがたと共にいてくださいます」と書き送っているとおりです。教会が、三位一体の主日に、兄弟的な一致を説くパウロの言葉を私たちに読ませるについては、もちろんそれだけの理由があると感じます。父と子と聖霊が唯一の神の本性において一致しているように、私たちも、自分の家族をはじめ、学校の同級生、仕事の同僚、この教会の中で自然的、人間的な相違や差異を越えて、三位一体の神への信仰において一致するようにと願っているからです。

そうするために、本日の福音から聞いた通り、「神は世を非常に愛されたからこそ」ということは、私たちにも必要な態度だと思いませんか。だから、私たちは父と子と聖霊と同じ「愛情」を受けられるように心をこめて神様に願いましょう。